

人格形成を規定する要因分析 (I)

— 芸術専攻者の性格特性について —

A Study of Factors Effecting on Development of Personality (1).

— Of the personality of those who are making a special study of arts. —

高 橋 正 臣

I 研究目的

人格形成に影響を与える要因としての環境と素質の問題については、Luxenburger が、輻輳説の立場から、すでにこれを巧妙に図式化し、説明している⁽¹⁾。芸術を専攻する場合、芸術という特定な領域における素質的能力や、美に対する内外の動機づけ、あらゆる芸術経験をとおしての学習結果等により、いわゆる芸術家的といわれる人格特性が形成されるであろうことが、Luxenburger の説から予測される。このことは、他の領域での専門家、例えば科学者においても同様である。

従来、芸術家の人格研究については、性格、才能等の面から、多数の研究結果が報告されている。Roe, A はアメリカの画家について⁽²⁾、⁽³⁾、また Andersen, I. と Munroe, R.⁽⁴⁾ 及び Munsterberg, E. と Mussen, P.H.⁽⁵⁾ は美術専攻学生について、それぞれロールシャッハ、TATを実施し、その性格特性の研究を行ない、Eiduson, B.T. は、精神医学的に問題をもつ芸術家と、正常な芸術家との比較研究を行ない⁽⁶⁾、Fisichelli, V. R. & Welch, L. は、観念連合の能力を通して、美術家、美術専攻学生の性格や創作能力の研究を行なっている⁽⁷⁾。また Meier, N.C. は、芸術家の特有な能力を画家について研究し、造形芸術に関する六つの種類の能力の優位性を強調している⁽⁸⁾。さらに創造という意味から、芸術家の天才と異常に関し、Maslow, A.H. は、自己実現の創造性示す性格特性と創造時の心的特性（絶頂感を経験している時の特性）との共通面を指摘している。

本研究は、人格形成を規定する要因分析のうち、特に芸術専攻者に関し、知的・性格的・適性等の面から、総合的に人格を解明しようとする一連の研究の一部をなすものである。すなわち、芸術専攻者の特有な性格・能力・特性等の有無について、上記の研究の中には、いくつかの相反する結果や、あいまいな点が認められる。従っ

て本研究においては、次のような仮説をたて、この仮説を検証することによって、従来の研究結果のあいまいな点を一層明確化するとともに、芸術専攻者の心理的特性のうち、性格特性の領域を解明しようとした。

仮説の第一点は、芸術専攻者（ただし本研究においては女子）には、他の者と較べて、性格特性上、特有な点が見出だされるであろう。第二に、性格の基底部が青年期までに形成されるという従来の諸説を容れるならば、芸術プロパーの専門経験が何十年という長期にわたる芸術家には未だ到っていない、二十才前後の、芸術経験の短い、あるいは断続的である芸術専攻学生においても、第一の仮説は認められるであろう。第三は、美術専攻者と音楽専攻者とでは、専攻領域の相違によって、性格特性上の相違が生じるであろう。第四は、現代のように激しいテンポで社会状況、環境要因が変化すれば、環境変化に敏感に反応する青年期の被験者は、時代的時間経過に伴って、当然性格上の変化を生じるであろう。

II 研究手続き

1 研究対象

昭和40年より46年までの芸術短期大学入学の、芸術専攻女子学生、計740名（美術・音楽に関する一定規準以上の能力をもち、学習してきたと判断されて入学を許可され、半年間大学で専門の芸術教育を受けたもの。このうち、芸術短期大学附属高校出身者は、すでに高校入学時に、音楽・美術の適性検査に合格し、高校3年間において、一般高校以上に特定の音楽・美術の芸術専門教育を修了している。

なお、昭和44年度は資料不足のため、また男子学生は人数が少ないため、統計的資料としてたええないので、今回は資料対象より除いた。表1、表2、表3参照）。美術専攻者は絵画・デザインを学習の主体とし、音楽は器楽・声楽を学習の主体としている。

表1 専攻別研究対象(美術) 数字は人数

	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	計	
出身高	附属高	9	14	8	9	10	8	58
	一般高	51	68	73	90	76	86	444
	計	60	82	81	99	86	94	502

表2 専攻別研究対象(音楽)

	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	計	
出身高	附属高	7	17	20	15	17	16	92
	一般高	27	19	23	27	25	25	146
	計	34	36	43	42	42	41	238

表3 出身高別研究対象(音・美の計)

	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	計	
出身高	附属高	16	31	28	24	27	24	150
	一般高	78	87	96	117	101	111	590
	計	94	118	124	141	128	135	740

2 研究方法

研究対象に、矢田部一ギルフォード性格検査(Y-G検査)を実施。実施の時期は、各年度とも、大学入学後半年から1年までの期間中である。

III 研究結果と考察

Y-G検査によって測定される性格特性は、次の12である(9)。

Depression :

たびたびゆううつになる、理由もなく不安になることがあるなどの、陰気な、悲観的気分や、罪悪感の強さを示す特性。

Cyclic Tendency :

気が変わりやすく、感情的で、物事に驚きやすい情緒不安定、気分変易性の強さを示す特性。

Inferiority Feelings :

劣等感に悩まされる、自信の欠乏などの自己の過小評価、不適応感の強さを示す特性。

Nervousness :

神経質で心配性、いらいらするなどの、ノイローゼ気味の強さを示す特性。

Lack of Objectivity :

ありそうもないことを空想する、ねつかれないなどの空想性、過敏性、主観性の強さを示す特性。

Lack of Cooperativeness :

不満が多い、人を信用しないなどの不満性と不信性の強さを示す特性。

Lack of Agreeableness :

気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見をききたがらないなど、攻撃的な強さを示す特性。この特性は、情緒不安定(D.C.I.N)と結合すると、社会的不適応をひきおこす。反面情緒安定と結合すると、社会的にも活躍する社会的活動性となる。

General Activity :

仕事が早い、動作がきびきびしているなどの肉体・精神面の両方にまたがる強さを示す特性。

Rhathymia :

人といっしょにはしゃぐ、何時も何か刺激を求めるなどの気軽な、のんきな、衝動的な強さを示す特性である。

Thinking Extraversion :

これは深く物事を考えたり、たびたび考えこむくせがあるなどの、思索的、冥想的、反省的熟慮性傾向とは逆方向の、考えが大ざっぱでのんきな傾向の強さを示す特性。

Ascendance :

会やグループのために働くなど、引込み思案でない、積極的な社会指導性、リーダーシップの強さを示す特性である。

Social Extraversion :

誰とでもよく話す、人と広くつきあうのが楽しみである、など社会的に对人的接触を好む、对人的に外向的、社交的、社会的接触を好む強さを示す特性である。

1 仮説1.2の検証

芸術専攻者特有の性格特性が存在するか。芸術経験がさして長期にわたらないと思われる芸術専攻学生にも、その特有な特性がみられるであろうか。

芸術専攻者と対比するための統制群として、一般大学生(女子1,974名)をとりあげ、その検査結果(10)を芸術専攻学生群と比較対比したのが表4、及び図1である。

(1) 芸術専攻者群(以下芸専群と呼ぶ)が、統制群と較べて有意な差を示す性格特性は、情緒安定に関しては、C(回帰性)、O(主観性)の2特性であり、社会適応性の面では、R(衝動性)、T(外向的思考)、A(支配性)、S(社会的外向)の4特性となっている。特にR(衝動性)については、平均得点が5段階点である標準点の4の段階にまで達している。

(2) 一般に性格構造の情緒領域においては、芸術専攻者は一般の者に較べて気分の動揺や変易性が大きく、感情的であり、ありそうもないことを空想してねつかれないなど主観的、過敏な傾向をもっている。特に情緒の変動が一般の者に較べて高いようであり、そうとう

人格形成を規定する要因分析 (I)

表4

芸術専攻者と一般者の比較

数字はY-G検査の得点

性格特性 グループ別	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
統 制 群	11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40
芸 専 群	11.29	11.15	8.83	9.82	9.15	6.85	10.84	11.27	11.03	8.82	9.13	11.65
		***			***			*	***	***	**	***

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05

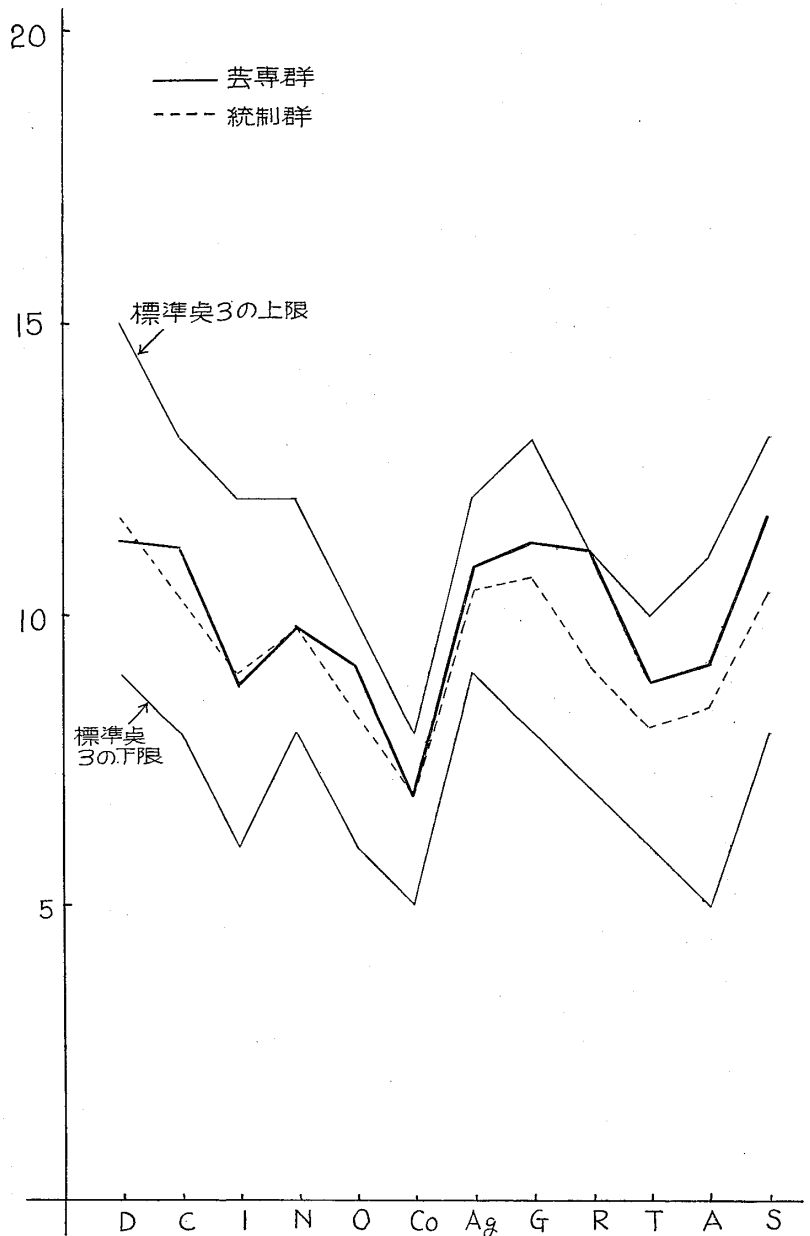
との回帰が激しいといえる。

(3) 社会適応性の領域面では、芸専群はG、R、T、A、Sといった多くの性格特性において一般の者と有意な差をもち、しかもその相違は、常識的な見地とはやや異なる、外向性への傾きを示している。特にR、T、S特性の得点が統制群よりかなり高いことは、彼らが気がるで活発ではあるが、非熟慮的、のんきであり、とりわけ衝動性が強く、対人的に社交性をもち、社会的接触を好む傾向を有していることを示している。

(4) 芸術専攻者が一般者と比較して、芸術経験がさして長期にわたらない青年期の時代にすでに特有な性格特性をもつという第1、第2の仮説はこれによって検証されたのであるが、その特有性を検討した場合、常識的に、あるいは従来の研究と比較して、情緒性の面では一致しているが、社会適応性の面ではかなり異っている。一般に芸術専攻者は、思索的、冥想的であり対人的には内向的とみられ、美術専攻学生を被験者として研究した Munsterberg, E. の研究もそのような結果を出しているが(11)、本研究では、その逆に近い結果が示されている。

このような結果は、一体どのような要因に基づいて発生したのであろうか。推測されうる第1の点は、このような性格特性は最近の学生全般にみられるものであり、統制群の資料(1965年)と時代的な差があるために生じたのではないかということである。この点を明らかにするために1965年(昭和40年)から46年に到るまでの7年間(昭和44年を除く)のR、T、A、S(芸専群と統制群の両者間の差の有意差が、危険率1%以下のもの)の検査結果を、表

図1 芸術専攻者と一般者の比較



5によって検討してみよう。

R特性において、やや年次的に得点増加の傾向がみられるが、T、A、S特性では全くそのような傾向は生じ

てなく、R. T. A. S全体の分散分析では、年次別変化の有意な差は認められない。すなわち、昭和40年から46年に到る7年間には、R. T. A. S特性については、有意な得点増加傾向の変化は生じてなく、芸専群と統制群の差は、昭和40年においてすでに芸術専攻者が一般者よりの高得点であり、そのままの状態が現在まで継続して来たわけである。従って時代的な年次的変化が両者の相違の要因になっているとはみなされない。

表5 芸術専攻者のR. T. A. S特性得点の年次別変化

	統制群		芸 専 群						平均
	昭和40年	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年		
R	9.10	10.82	10.71	11.19	11.14	10.88	11.31	11.03	
T	8.08	8.72	8.70	9.12	8.98	8.38	8.97	8.82	
A	8.42	9.14	9.94	8.78	9.06	8.81	9.10	9.13	
S	10.40	11.47	12.34	11.35	11.75	11.14	11.83	11.65	

推測されうる第2の点は、以上の芸術専攻者群の中に、音楽専攻者が含まれているためではないかと思われるので、美術専攻者のみを取り出し、年次別にR. T. A. Sの特性得点を提示したのが表6である。

表6 美術専攻者のR. T. A. S特性得点の年次別変化

	統制群		芸 専 群						平均
	昭和40年	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年		
R	9.10	10.35	11.15	11.48	11.29	11.07	11.82	11.25	
T	8.08	8.62	8.33	9.40	8.83	8.78	9.38	8.91	
A	8.42	9.03	9.88	8.89	8.69	9.03	8.91	9.06	
S	10.40	11.65	12.32	11.05	11.60	11.74	11.88	11.71	

この表に示されるように、美術専攻者もこの7年間にR. T. A. S特性に関する年次別変化の一定傾向は生じてなく(分散分析の結果、有意差なし)、統制群との間の差は認めざるを得ない。従って以上の諸検討の結果より、上記(3)の芸専者の社会的適応に関する点については、一応研究結果通り解釈してもよからう。

(5) なお Munsterburg, E. によれば、美術専攻者は強い罪の意識に悩むという、いわば抑うつ傾向をもつことを示唆しているが、本研究では表4にみられるように、D(抑うつ性)特性については、検定の結果、両者間に有意差は認められず、むしろ芸専群のほうがやや低い安定した得点を示している(統制群11.73、芸専群11.29。美術専攻者群だけでは11.36。表8を参照)。これに類似した性格特性としてのI(劣等感)、

N(神経質)などについては、両者間にはほとんど差が認められず(Iについては統制群9.00、芸専群8.83、Nについては、統制群9.76、芸専群9.82)、芸術専攻者は、一般者以上に劣等感に悩んだり、神経質で気になってノイローゼになりがちであるなどといったことは少ないようである。

(6) Roe, A. や Munsterburg, F. によれば、芸術専攻者の性格特性として、攻撃性の弱いことをあげているが⁽¹²⁾、本研究においても、一般的にはこのことはいえるようである(Agについて、統制群10.45、芸専群10.84)。しかし統計上有意な差は認められないが、得点上は芸専群がやや統制群を上廻っている。そこでこれを音楽専攻者を除いた美術専攻者群と統制群とを対比してみると、Roe, A. や Munsterburg, E. とは逆の結果が出てくる。すなわち、統制群の得点10.45に対し、美術専群は11.05であり(表8を参照)、両者間には、検定では5%の危険率で有意差が認められる。つまり美術専攻者は一般者に較べて、むしろ気が短く、人の意見をききたがらず、正しいと思うことは人にかまわず実行する行動傾向を持っているといえる。しかし、情緒面のD, I, N特性の得点が高くないため、社会的不適応には到っていないと思われる。

(7) 従来、芸術専攻者は情緒的に不安定で、気むずかしく神経質であり、社会との交流を好まず陰とん的であり、社会的に不適応な性格特性をもつものが多いと考えられがちであったが、上記の諸結果によれば、本研究の研究対象を芸術専攻者とみなす前提にたつならば、芸術専攻者は確かに情緒的に気分の変動が大きく、そううつ回帰的傾向をもち、空想的主観的ではあるが、一般的な情緒適応面では一般者とは大きな相違はない。社会的適応面では、むしろ一般者以上に外向的で対人接触を好み、正しいと思えば人にかまわず実行するとともに、かなりの指導性(リーダーシップ)も発揮し、人とはしゃいだり、常に何かの刺激を求め、気がるで衝動的であり、熟慮にやや欠ける性格特性を持っているといえる。

(8) 上記のような芸術専攻者特有の性格特性のある部分が、もし芸術を専攻するものの本質的特性に基づくものであるとともに、ある部分が、芸術を専攻し、芸術経験を重ねることによって一層強まると仮定するならば、高校入学時にすでに、芸術適性検査のためのかなりの準備学習を行ない、更に高校3年間に特定の芸術教育を組織的に受けている芸術短大の附属高校卒業者(の芸術専攻)群と、芸術大学入試のため、あるいは興味や趣味のために個人的な芸術学習は行なっているが、組織的、系統的な芸術教育を受けていない一般高校卒業者

人格形成を規定する要因分析 (I)

表7

附高卒群・一般高卒群別特性得点

特性群 グループ	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
附高卒群	11.50	11.64	9.43	9.79	9.34	7.29	10.62	11.11	11.13	8.81	8.52	10.89
一般高卒群	11.23	11.03	8.67	9.83	9.10	6.74	10.90	11.31	11.00	8.82	9.28	11.84
統制群	11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40

P<0.2 P<0.1

P<0.1 P<0.02

(の芸術専攻) 群との間には、性格特性上の相違がみられるであろうと推測される。

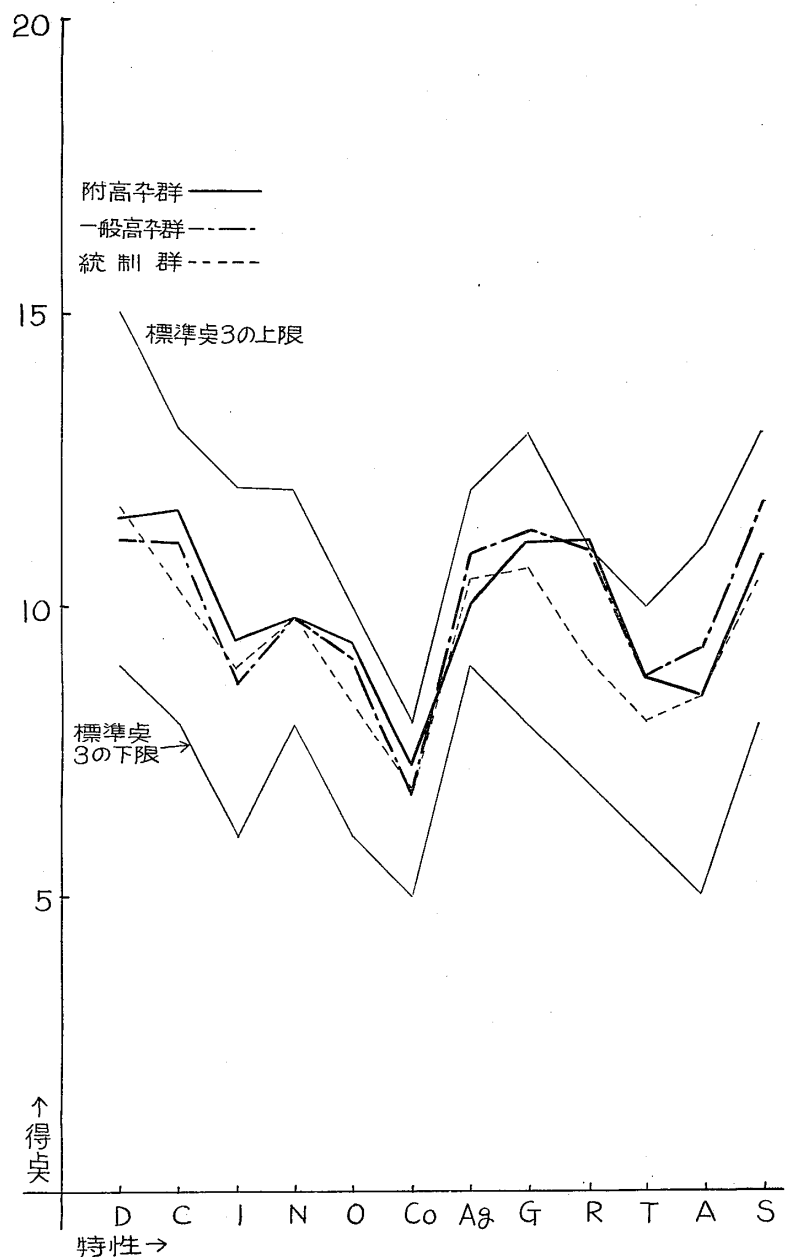
以上の両者の相違を明らかにしているのが、表7及び図2である。

附高卒群と一般高卒群との間で、十分な有意差を示す特性は、S (社会的外向) であり (P<0.02), A (支配性), I (劣等感), C (回帰性) がこれに続いている。

情緒的特性群 (D, C, I, N, O, Co) を全般的に検討した場合、N 特性を除いて、附高卒群が各特性において一般高卒群よりも高得点となっている (分散分析の結果、危険率5%で有意差が認められる。N 特性についての附高卒群と一般高卒群間には有意差はない)。すなわち情緒的領域においては、附高卒群のほうが一般高卒群よりも全般的に安定度が低く、特に自信に欠け、実際以上に自己を過小評価しがちである点と、気分の変易性の大きい点が顕著である。社会適応の性格特性群からみれば、附高卒群と一般高卒群との得点関係は、情緒面とは逆になっており、R (衝動性) を除いては、一般高卒群が附高卒群よりすべて特性得点が上廻っている (分散分析の結果、危険率10%)。すなわち、いつも何か刺激を求める、気軽で衝動的な特性のみは附高卒群のほうが高いが、引込み思案でなく、積極的な社会指導性 (A特性) をもち、人と広くつきあうのを好む社交的、社会的接触性や、正しいと思うことは人にかまわず実行する点では、一般高卒群のほうが高くなっている。従って、情緒的領域・社会的な適応領域の総合面からみれば、一般高卒群のほうが附高卒群に較べて「安定積極型」(プロフィール上では、右下がり型) であり、より調和的、適応的、安定的な行動をとりやすいといえよう。

図2

附高卒群・一般高卒群別特性得点



2 仮説3の検証

美術、音楽の専攻領域の相違によって、性格特性上の

表8 専攻領域別・特性得点

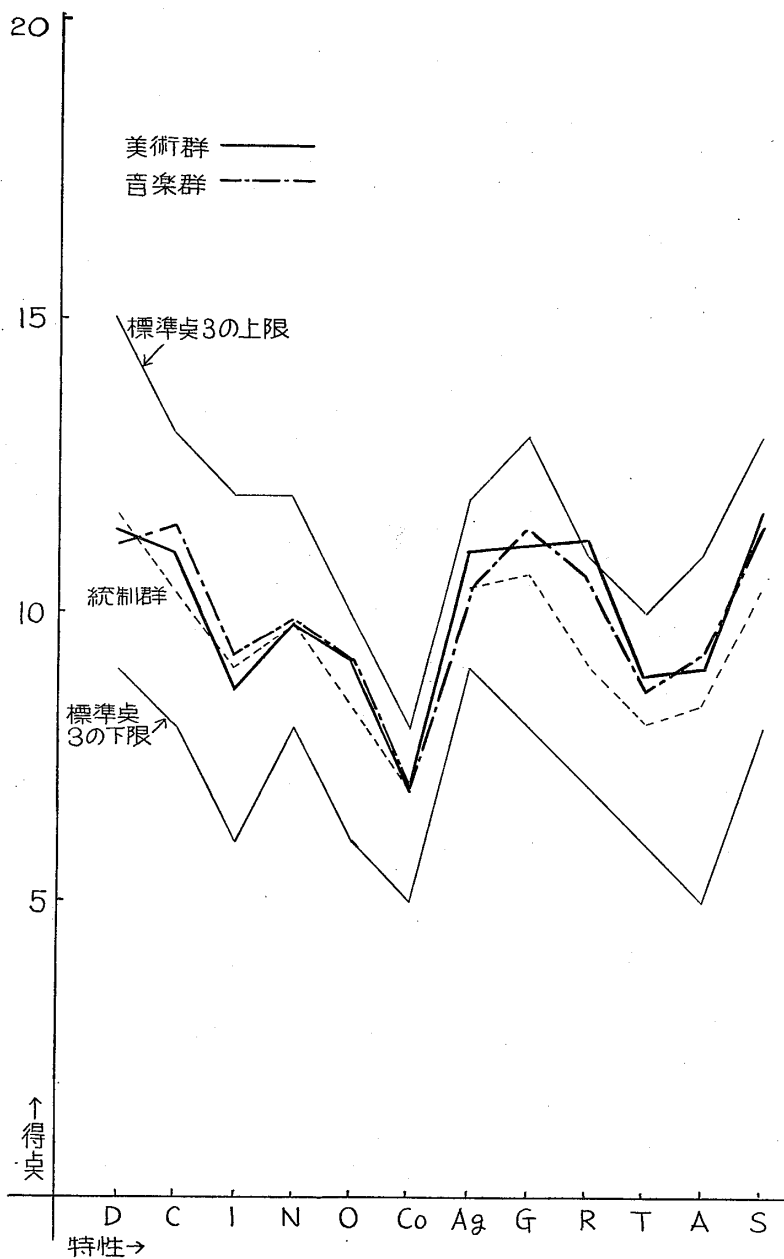
グループ \ 特性群	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
美術群	11.36	11.00	8.63	9.80	9.16	6.85	11.05	11.19	11.25	8.91	9.06	11.71
音楽群	11.14	11.46	9.24	9.86	9.12	6.86	10.40	11.43	10.56	8.63	9.28	11.52
統制群	11.73	10.33	9.00	9.76	8.36	6.88	10.45	10.70	9.10	8.08	8.42	10.40

P<0.1

P<0.05

P<0.01

図3 専攻領域別・特性得点



のはみられず、各領域において、各特性得点の相対的な高低がおりまじっている。

しかし特定の特性についての両群間の差をあげてみると、情緒領域においては、音楽専攻群がI（劣等感）について、社会適応領域においては、美術専攻群がAg（攻撃性）、R（衝動性）についてそれぞれ得点が有意な差をもって（I. $P<0.01$, Ag. $P<0.05$, R. $P<0.01$ ）相手群より上廻っている。

すなわち、音楽専攻者のほうが美術専攻者よりも、自信に乏しく、自己を過小評価する傾向が強く、逆に美術専攻者は音楽専攻者よりも、自己の信ずることは人にまわらず実行し、それだけ人の意見はききたがらず、気軽で、常に何か刺激を求める衝動性の強い傾向をもっているといえる。

従って、専攻領域の相違（音楽・美術）は、やはり性格特性上の相違を生んでいるが、それは一定のまとまりのある特性群間の一定傾向といったものではなく、I, A, G, Rといった特定の個々の特性上に生じたものである。

3 仮説4の検証

時代的時間経過に従って、性格特性上の変化がみられるであろうか。

昭和40年から昭和46年までの性格特性の得点変化を示したのが、表9及び図4である。

分散分析の結果、昭和40年から46年に到る7年間（44年を除く）に一定の増減傾向がみられる性格特性はN（神経質）及び、

I（劣等感）である。昭和40年度は、N, I特性ともやや得点は高いが41年度で減少し、以後46年に向けて年度の変化とともに、特性得点は次第に増加している。昭和

相違が生じるであろうか。表8, 図3で明らかのように、情緒, 社会適応領域とも、美術・音楽両専攻群間には、性格特性上の差について、一定傾向を示すようなも

人格形成を規定する要因分析 (I)

表9

各特性・得点の年次別変化

*P<0.1 **P<0.05

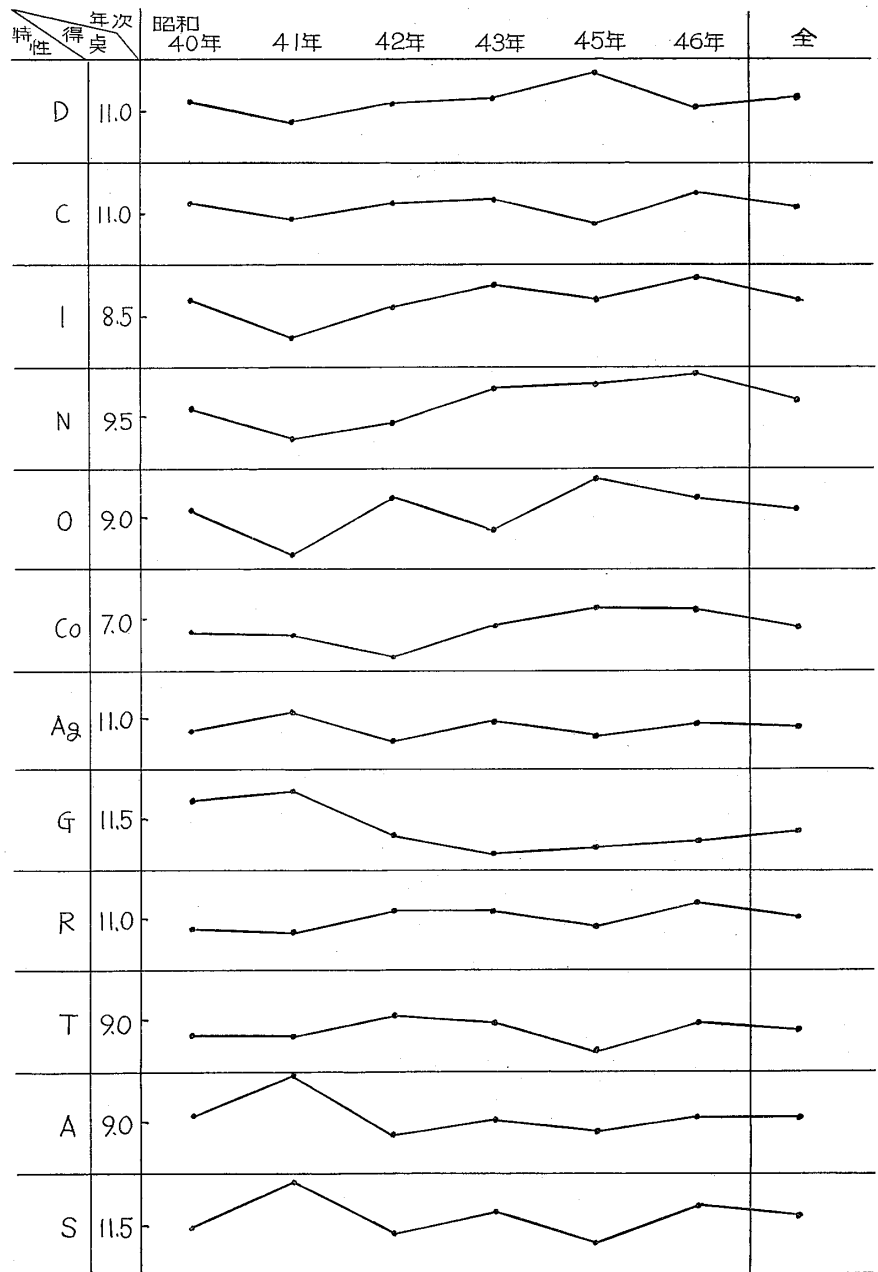
年次 特性	昭和40年							全	年次 特性	昭和40年							全
	昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	全			昭和40年	41年	42年	43年	45年	46年	全	
D	11.02	10.83	11.17	11.26	11.77	11.56	11.29	Ag	10.78	11.14	10.54	10.96	10.68	10.93	10.84		
C	11.21	10.91	11.23	11.29	10.80	11.44	11.15	G	11.84	12.05	11.16	10.80	10.97	11.05	11.27		
I	8.82	8.08	8.68	9.18	8.82	9.26	* 8.83	R	10.82	10.71	11.19	11.14	10.88	11.31	11.03		
N	9.64	9.04	9.40	10.09	10.19	10.38	** 9.82	T	8.72	8.70	9.12	8.98	8.38	8.97	8.82		
O	9.13	8.24	9.40	8.87	9.80	9.39	9.15	A	9.14	9.94	8.78	9.06	8.81	9.10	9.13		
Co	6.74	6.70	6.25	6.88	7.27	7.20	6.85	S	11.47	12.34	11.35	11.75	11.14	11.83	11.65		

40年から46年に到る7年間の環境条件の変化は、社会構造の複雑化、情報社会の形成、高度経済成長のひずみ、物質文明の急速の進歩、世界思潮の変容等に基づき、個体に異常なほどの過剰刺激を与え、その結果、瞬間的な適応反応を強要し、この過剰刺激に対する異常緊張維持と、反応結果の不適應とによって、いわゆる文明病と呼ばれる神経症的傾向であるノイローゼを発生せしめている。本研究結果も、神経質でいららすノイローゼ気味の強さを表わすN特性が、時代的時間経過につれて得点の上昇をみせているが、これは以上の環境条件と個体との関係の変化を裏づけているものと思われる。

このN特性の得点の増加は、当然自信の欠乏などの自己過小評価を生み、不適應感の強さを示すI特性の得点の増加を生じていると推測される。

なお、明らかな有意性は示さないが、ありそうもないことを空想したり、ねつかれないなどの空想性や、過敏性、客観性の欠如等を表わすO特性の得点も、振幅は大きいですが、全体的な流れとしては、

図4 各特性・得点の年次別変化



年度が進むにつれて増加の傾向をみせており、これも上記の裏づけをなすものと思われる。

従って、激しいテンポで移り変わる、時代的時間経過に伴う環境条件の変化は、やはり人格形成や人格構造を規定する要因として、大きく影響を与えているといえるだろう。

ただしこのことが、芸術専攻者以外の一般の対象についてもいえるかどうかは、時代的経過に関する特性得点の変化の資料として、統制群のものがないために何ともいえない。

VI 要 約

本研究は、人格形成を規定する要因分析のうち、特に芸術専攻者について、総合的にその人格を解明しようとする一連の研究の一部をなすものである。すなわち、芸術専攻者（女子）の性格特性上の特有性について、(1)その存在性、(2)専攻領域の相違による差異、(3)時代的時間経過にともなう環境要因の変化の影響、の仮説を設定し、これを検証した。

結果としては、(1)については、その存在性が認められ、(2)については、専攻領域の相違によってその特有性にも差異が生じることが明らかとなり、(3)については、数個の性格特性について、時代的時間経過にともなう環境要因の変化の影響が認められた。今後は資料対象を男子にも広げるとともに、知的領域との関連性の解明を試みてみたい。

(8) Meier, N.C. : Factors in artistic aptitude : Final summary of a ten years study of a special ability. Psychol. Monogr. 51, 1939.

(9) 辻岡美延 : 新性格検査法, 1965.

(10) (9)と同じ

(11) (5)と同じ

(12) (5)と同じ

(1) 高橋正臣他 : 心理学—行動の理解—, 1970.

(2) Roe, Anne : Artists and their work. J. Person., 15, 1946

(3) Roe, Anne : The personality of artists. Educ. and Psychol. Measurement 6, 1946.

(4) Andersen, Irmgard and Munroe, Ruth : Personality factors involved in student concentration on creative painting and commercial art. Rorschach Research Exchange & Journal Projective Technique, 7, 1948.

(5) Munsterberg, E & Mussen, P.H. : The personality structures of art students. J. Person., 21, 1953.

(6) Eiduson, B.T. : Artist and non-artist : A comparative study. J. Person., 26, 1958.

(7) Fisichelli, V.R. & Welch, L. : The ability of college art majors to recombination ideas in creative thinking. J. appl. Psychol., 31, 1947.